Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

P 76

豊かな感性を育てる一連の関わり方

――――２年間の米づくりを通して――――

藤田　源吾（智徳幼稚園）

（はじめに）

園内は、自然環境に恵まれているが、園周辺では都市化の影響で田畑が減少し、子ども達は、土に触れる機会が少なくなっている。その為園内に田畑をつくり、野菜づくりや米づくりに取り組んでいる。特に、米はわれわれ日本人にとって、毎日の食卓に欠かせないものである。子ども達にその成長の過程を知る機会を与え、一粒の米の大切さを伝えていきたいという思いを常に持っている。作物を育てる中で、お互い協力し合い、発見や喜びを伝え合うことで、学ぶことも大きい。子ども達一人ひとりの豊かな発達を促していきたいと考えている。平成７年の開園当初より、四歳児が米づくりを行ってきた。しかし、一年間だけでは、子ども達の米づくりに対する関心の持ち方が薄いのではないだろうかと感じるようになった。そんな時、教師側から、一年間だけでなく、二年間継続して米づくりを体験させた方が、子ども達にとって、より豊かな感性を育てることができるのではないかという意見がだされた。そこで、平成１４年、１５年度に、四歳児、五歳児と二年間連続して米づくりを体験した。その結果、子どもにどのような変化がみられたのか、また、教師の働きかけによって、子ども達がどのように変わったのかを考察していこうと考えた。

（方法）

田を耕すことから始まり、田植え、草ひき、案山子づくり、稲刈り、脱穀、しめ縄づくりまでの、一連の活動を二年間経験することによって、教師の関わりを通して一年目、二年目の子どもの様子を比較する。

［田植えの活動の一部のみを抜粋した］写真１参照

一年目（平成１４年度）

取組対象　四歳児１５名

・特に異なった反応を示すＡ子、Ｂ男、Ｃ男、Ｄ男を重点的に捕らえた。

子どもの姿	教師の受け止めと援助	環境
平成14年6月10日		
A子　最初は恐る恐る入るのをためらっていたが、教えてもらった通りにする。	みんな楽しみにしていた田植えだが、転ばないように気をつけること、赤い印の所にしっかりと植えることを伝える。	農家の方に教えてもらう
B男　「足が抜けない。助けて」といいながらも楽しそうだ。	転びそうになったので手をひいてやる。	
C男　カエルを見つけ捕まえようとする。	取ったカエルをケースにいれてもよいと言う。	
D男　田に入るのを嫌がり教師と一緒に植える。	汚れても大丈夫ということをやさしく伝える。	

二年目（平成１５年度）　五歳児１５名

・四歳児１９名と一緒に田植えをする。

子どもの姿	教師の受け止めと援助	環境
平成15年6月5日	子ども達からの意見を取り入れ、四歳児と混合グループをつくる。	園児のお母さんで農家の方の話を聞く。（田を守っている三つの神様の話）
A子　去年の田植えの仕方を覚えていて、始めての四歳児にやさしく教える姿が見られる。	四歳児をリードする姿や、教える姿を見て、確かな成長が感じられた。	
B男　去年Fちゃん尻持ちついた」と思い出している	去年のたわいもない話から少しずつ思い出せるように配慮する	
C男　「カエルやみみずもいたなあ。」と生き物に興味がある。	虫やカエルに興味のある子どもと一緒に図鑑で調べたりする。	
D男　「前は嫌だったけどもう大丈夫」と積極的な様子をみせる。	転びそうになった時「平気、平気」と強がりを言っていた。自分でしたいという気持ちを大切に、そっと見守る。	

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

（考察）

田植えが終わってもA子は、時々稲の様子をみにいく姿が見られた。B男は、「田んぼどうなっているのかなあ」という教師の問いかけに対し、様子を見にいく。C男、D男は全く無関心である。しかし、田んぼの近くで、いつも網をもって昆虫を捕まえては喜んでいる。二年目に入ると五歳児の中に、始めての四歳児を指導する子どもが現れた。自主的には、女子２名だったが、教師の働きかけにより、指導できる子どもは女子５名、男子３名と増えていく。成長のあとが伺える。また、一年目には、あまり関心を示さなかった子どもが多かったが、収穫したしたお米で、子どもクッキングの時におにぎりや、親子どんぶりをつくって、食べたりしたことによって、お米に対しての興味、関心はさらに広がり、会話のなかでの話も増えてきた。

二年間連続した作業をすることにより、子ども達の行動が、より活発になり、確かな自信となったと考えられる。さらに教師の熱心な働きかけに対し、こども達の反応もより強くなり、教師の援助の重要性が感じられた。（写真２参照）

また、米づくりの環境が子ども達にもたらす影響が大きかった。季節を通して、田んぼにくる生き物、カエル、あめんぼ、チョウ、　などに触れ、図鑑で調べたりしながら、子ども達の興味、関心はさらに広がりを持った。米づくりを通して、子ども達のなかに育ってきたことは、個人個人違っているが、これらの体験は、子ども達の感性を豊にし、感動を表現する力の源となっている。

また、教師も子どもとより深く関わり合うことによって知識を得て、互いに興味の世界が広がり、今後の生き方に影響を及ぼしていくと考えられる。

最後に子ども達が脱穀作業をした時にでた言葉を教師がつないで、詩としたものをまとめ挙げておく。

（写真３参照）

米ダンス

お米ダンス　米米ダンス　米米米ダンス
いっぱいなった
すずめさん食べなくてよかった
力を合わせてどんどんとるぞ
ほうら　ほうきができた

お米ダンス　米米ダンス　米米米ダンス
こぼすともったいない
超特急でやらないと
力を合わせてどんどんとるぞ
ほうら　いっぱいになった

このまま食べたらかたいなあ
おいしいお米できるかなあ
おかわりいっぱいあるね

↑写真１（田植え）

↑写真２（稲刈り前）

↑写真３（脱穀作業）

NII-Electronic Library Service